

IV . 地球研と東大 IHS による東京セミナー を振り返る

ここでは、阿部健一（地球研・教授）と梶谷真司（東京大学 UTCP・教授）の語り合いを通して、共催した3回の東京セミナーを、第3回の内容を軸に振り返ります。



地球研と東大 IHS による 東京セミナーを振り返る

2019年2月4日（月） 地球研にて

阿部 健一 総合地球環境学研究所 教授

梶谷 真司 東京大学 教授 / 共生のための国際哲学研究センター (UTCP) センター長

1. おもしろい研究所の人たちとおもしろい発表をすること

阿部 これまで3年、地球研の東京セミナーにつきあっていただき、ありがとうございました。地球研は、関西ではそこそこ知られるようになったんだけど、東京ではまだネームバリューがないということで、東京セミナーを1年に1回やっていた。そこそこの人を集めて、話題提供者も地球研の最新の成果、そしてそれにマッチングするようなそれなりの人を呼んで、お客さんもけっこう来てくれて、シンポジウム形式でやった。それ自体はすごくおもしろかった。

けども、いつまでもこれを続けてどうするというのがまず疑問にあったのです。一般の方がたを相手に話をするのは、とても大事なことです。話すほうも、たんに地球研の広報をするというよりも、あらためて自分のしている研究を紹介するというのは大事なことだと思ったのです。しかし、もっとべつのやり方ができないかというときに、地球研の弱点といったらなだけ



梶谷 真司



阿部 健一

ど、あまり大学生や大学院生と話す機会がない。

梶谷 そうですか。

阿部 もちろん、名古屋大学などとは学術協定を結んでいますが、特定のプロジェクトで授業をもっているわけでもない。むしろ、私たちが地球研のよさを聞いてもらう、あるいは話をする相手は、「地球研という研究所がある」ということを知ったら、おもしろいと思ってくれるような人です。たとえばリーディング大学院プログラム、それにはいくつかの環境、あるいはもうすこし広い国際理解、それは梶谷さんのところのプログラムですが、広い意味での環境あるいはこれからの世界をどうするかを考える、そういったプログラムに属している若い研究者。これから地球研の研究者として、「そんなにおもしろい研究所があるのだったら、ぜひオレも」と思ってくれるような人を相手に話したい。

梶谷 そういった感じのことはおっしゃっていましたね。

阿部 いきなり結論というのもなんだけれども、こちら側としてはおもしろかった。

梶谷 こちらとしても、毎年なんだかんだと5人くらい、この2年は院生がポスター発表をさせていただいた。リピーターで2回連続でやっているのは、もちろん楽しかったからやっている。「よかったから、今年も……」という事でやってくれていると思うのです。関心をもってくれている学生も多いですね。

阿部 もちろん制度的に東京セミナーと名づけているから東京で、というのが最初にあったのですが、結果としてこの距離感で、年に1回というのもよかったような気がする。年に1回の研究発表会——学会とはちょっと違うけど学会的な、多少は袴を着てあらためて、こちらも学生さんのポスターを中心とした発表を聞く。そして、うちの研究者も発表する。日常的でない非日常的なところもよかったかなという感じはします。

梶谷 リーディングということを核にして、東大だけでなく日本のあちこちの大学から同じような年齢の研究者が集まったのもすごくよかったですね。

阿部 東大のほうではリーディングですが、いまごろになってと思われるかもしれないけども、参加してくださった院生の人たちは、メジャーはそれぞれの専門があって、あくまでもリーディング大学院プログラムの多文化共生というのはマイナーというか。

梶谷 そうですね、副専攻ですね。今回の彼らは、もちろん自分の専門があつてのものだけでも、そのときに彼らには、「あまり専門の話が無理にしないで」とは言っていました。自分の専門じゃないから、いい加減な話になるかもしれないけど、「それは恐れるな」と言っていたのです。

地球環境とか政治とか、そのときそのときでテーマがあつたのですが、そこに結びつけて、なにかそれなりのことができればよいくらいのことで。とにかく専門から離れるということを彼らに意識させたんですね。

阿部 私もびっくりしたのは、たとえば日常・非日常のことを話していた大池惣太郎さん（ポスター G-05）も、べつにそれを専門でやっていたわけではない。

梶谷 大池さんはバタイユなので、まったく関係ないですね。

阿部 でも、私たちにとってはすごくおもしろかったし、彼自身もおもしろがってやっている。あとは、みなさん大なり小なりそうだったと思うけど、メキシコのアマモの種の、言語学の中川亮さん（ポスター G-08）かな。

梶谷 彼も専門は言語学だけれども、あの研究をやっているわけではないんです。

阿部 そういう具合の広がりですよ。まったく違うところの研究を彼ら自身がおもしろがってやっているのが伝わるし。

梶谷 彼らも、言語なら言語とか、大池さんもフランスで思想家を扱うとか、どこかで専門性を残しているんだけど、フィールドとかテーマとしては

外に出るということは彼らも意識してくれた。そのうえで、要は、話として、テーマとしておもしろいかどうかですよね。専門的に緻密かどうかということよりも視点とか見方がおもしろいかということを中心に重視した。準備のために、最初にどういうテーマでやるかという勉強会をして、ポスター発表のポスターのつくり方も相談して、2回は少なくともやっています。それから当日を迎えているので、けっこうきっちりやっています。

阿部 いろいろと準備をしていただいてありがとうございます。

2. 3年間やってきたことのあらまし-第3回を終えての目線で

阿部 今回は3年目で、最初の年が「地球の想像力」(付録参照)。第1回は想像力というキーワードで、高野孝子さんは現場主義というか、地に足をつけるヴァナキュラーな考え方をすごく大事にするし、近藤康久さんは、我々のもっている知識情報をどう活かすのかを常に念頭に置いて彼は研究をしている。そのなかで梶谷さんが経済という視点と、豊かにどう生きるかということを出してくれたのかなという感じはします。

それを受けて、第2回は政治ですよね(付録参照)。正直に言って、地球研がいちばん弱い部分で、政治というものを正面きってあまり議論したことはなくて。

梶谷 でも、どこでなにをするにも、どこかで政治が関わっているはずですよ。地球研・地域環境知プロの佐藤哲(注1)さんとか地球研・エリアケイパビリティープロの石川智士(注2)さんと話をしていて、行った先で地元の役人なども含めて、そういう人たちとどのようにしてやっていくのがかき

注1) 地球研プロジェクト「地域環境知形成による新たなコモンズの創生と持続可能な管理」(2012年度～2016年度)のプロジェクトリーダー。地球研名誉教授。現愛媛大学社会共創学部教授。

注2) 地球研プロジェクト「東南アジア沿岸域におけるエリアケイパビリティープロの向上」(2012年度～2016年度)のプロジェクトリーダー。現東海大学海洋学部教授、地球研客員教授。

んと整わないと最終的には進まないのだという話をしました。広い意味での政治が大事だなと。

あとは、いまの時代だと、住民との合意を取り付けるという民主主義的な手続きもとても大事です。たまたま私はその前に國分さんの本を読んでいて、それも小平の森林を守るという環境問題に直結するような話でした。彼を呼べてよかったですね。

阿部 あのときの基調報告は國分功一郎さんと地球研の熊澤輝一さんでした。國分さんの場合は、道路をつくる・つくらないという、はっきりとしたイエス or ノーの答えをどうするのだという、課題が明確ななかでの民主主義。熊澤さんの場合は、地域をこれからどうするのだと。課題がないかということではなくて、課題だらけなのだけれども、これからどうするのだということをとともに考える。これはかつこつきの「民主主義」、みんなが参加して決めるという意味での民主主義ですが、國分さんの話と熊澤さんの話は、同じようではじつは違っていた。

梶谷 そうですね。住民主体のコミュニティづくりとか意思決定と、政治との戦いですよね。

阿部 地球環境問題と、一言でいっているなかでも、だいぶ違う側面がある。たとえば気候変動枠組条約みたいなところで、温暖化ガスの濃度をこれだけに下げないといけないう具体的な目標が設置できる問題と、私たちが地球環境問題として考える、将来はどのように豊かであるべきか、どういう未来をつくるべきか。未来をつくるにあたって、豊かさとはなにかを問いなおさないといけない。そういった問題の設定の仕方とは、縦と横くらい違ってはいるかもしれない。その二つが地球環境問題というなかに混ぜこぜになっているような感じもします。

なにが言いたいかという、課題解決の学問と価値創造の学問という二つのものが地球環境学のなかで混ぜこぜになっているかもしれないなど。問題といたり、地球環境問題は「課題解決だ」と思ったりしてしまっているけど、じつは価値創造ではないか。なにが豊かさなのかを問いなおしながら、その

豊かさを実現するためにはどうすればよいか。

梶谷 そうですね。いままでの価値観をそのまま維持してやっていると、けっきょくどうやって抑えるかとか、どうしてもそういう話にしかならない。

阿部 いままでと同じ価値観で将来をフォーキャストとすると、解決すべき課題が浮かびあがってくるだけ。

梶谷 それはたぶん、モグラ叩きみたいに、次々と出てきたものに対処するだけになる。

阿部 課題解決も大事なんだけど、そういった課題解決の学問をするのではなくて、豊かさとはなにか、新しい価値、いままでみんな気がつかなかったことこそ、うちが大切にしなければいけないのではないかと。創造といっても、新しいものをつくるというより、いまみんな気がつかないものに光を当てて、こういったものを大切にしなきゃということになるのだと思う。第3回は「われわれがどう生きるべきか」に傾斜しているのですよ。どういう世界が、どういう社会が将来にあり得るべきなのか。生活、文化という、具体的にはモノに焦点を当ててというところで。

梶谷 それともう一つ、これは私が第1回のときに多少言及したのだけでも、環境問題というのはやっぱり経済との関係は切り離せない。とくに資本主義の問題。第1回の時に私が共有型経済の話をしたのは、環境問題にとってより親和性の高い——環境問題を解決したり、あまり大きな問題を引き起こしたりしないという点で、より親和性の高い経済システムは、資本主義と共有型経済とのどっちかというところ、共有型経済のほうがよい。

資本主義と社会主義は、かつては対比されていたのですが、社会主義の国も環境破壊はひどかった。自然から富を取奪してものを生み出すという意味においては、資本主義も社会主義も大差はないと思うのですよ。そういう意味では、共有型経済は資本主義と矛盾はしないのだけれども、環境にとってはより負荷が少ない経済システムなのかなという気がします。実際に資源の消費を少なくするというところでいうと、共有型経済もよいなと。

そういう点で、企業活動自体にこの理念を入れている会社という意味では、

無印良品（株式会社良品計画）はよかったと思うんですよ。

阿部 なるほど。

梶谷 地球研の縁でということでは、鞍田崇君が講義で矢野直子さんと呼んでくれていて、私はその話を聞いて感激して、このテーマを出したときも、矢野さんのことが念頭にあった。なんだかんだいって、企業活動が環境問題と折り合いをつけられるようなモデルができないと。企業というのは必要なものだけをつくって消費するというわけにはいかないから。そういう点で、どうかかたちですれば折り合いがつくのかというのを、矢野さんから聞けるかと思って、彼女に声をかけたのですね。

3. 共有型経済を基礎に新しい生き方を探ること

阿部 第3回で無印の矢野直子さんに来てもらったのは大きかった。そもそも経済というのも、本来は金儲けという意味ではなくて、経世済民ですか、みんながどうすれば豊かになれるのかを考えるという、そういった発想だったはずでしょ、アダム・スミスとかそのころには。ところが、ある時点からは、会社や企業が、今年はこれくらい儲けた。それなら来年はもっと、ということになっている。

梶谷 ひたすら富を生み出すことじたいが目的になっている。

阿部 昔は違っていたじゃないですか。会社にしても、社会のためにやる。べつに松下幸之助のことを出すわけじゃないけど、松下幸之助は社会に役立つものをつくる。そのためのコスト、次のことをするための多少の利潤はもちろん得るけど、あくまでも自分のところの会社がつくる商品あるいはサービスが社会のために役に立つのだという前提のもとにやっている。

銀行なんかもそうですね。これは私が関わっている銀行の人から聞いたのですが、昔は、銀行の役割として、「お金の余っているところがどこにあ

るのか」をちゃんと知っていた。お金が足りないところ、彼らにちょっと融資をすれば、彼らは起業したり、社会に役立つ仕事をしてくれたりする。それを融通するのが銀行家だった。

考えてみれば、グラミンバンクもいっしょなのですよ。いまはノーベル賞とかをもらっているけど、かつては銀行だってそういう役割があった。社会のために、お金が足りないところにきちんと。新しく起業しようとしている、お金が足りないといっている彼らがやりたいことは、ほんとうに社会の役に立つのか。あるいはきちんと持続可能性があるのか、一時的なものではなく、長くつづくのか、そういったものを判断する力というものを銀行員として経験として積み重ねていく。それが銀行家だった。

梶谷 やっぱり、投資のように、お金を生み出すためにお金を使うようになって、本当に必要かどうかは関係なくなった。消費もそうですよね。モノが要るからつくるのではなくて、売るためにつくる。いらぬのに資源を使って、その結果ゴミも出るという感じになったから、資本主義も変わってしまったのですよね。

阿部 消費でもそうですよね。必要ないものを買わせようとする、そっちの方向に全てのもが行っている。それが梶谷さんの言葉で言えば、共有型経済が必要だということにつながっていくのだけれども、これがなかなか実行できない。企業もやっぱり変わってきているのではないかと思うけども。

梶谷 けっきょく収入をどうするのだという話になるわけですが、共有型経済の部分が増えると、買わなくてもよいものが増えていく。みんな持っているから、お金を払わなくてもよいようになっていくと、多分そんなに収入がなくても、そんなに稼がなくても生きていけるようになる。でも、多分それで満足しない人たちがいるので、それは難しい。

他方で、中国で自転車をみんなで共有できるようにしようといっって、山のように自転車のゴミが出ている。たしかに、みんなで共有したらしたで、無駄がなくなるのかというのは、中国の例をみていると、自分のものでないから全然大事にしないのかもしれない。たぶん、普通以上にゴミが大量に出ていますよね。

阿部 自分のものではないから大切にしないというのは、それこそ「コモングの悲劇」。

梶谷 みんなのものだから大事にしようという発想になればいいのだけでも、そこがやっぱりなかなかね。どんどんとみんなで消費すればよいみたいになると、使ったもの勝ちみたいになってしまう。

阿部 共有するといっても、さまざまなかたちの共有がある。シェアハウスとかカーシェアリングとか、こういったものもそうですよね。ああいうのも消費財というのか耐久財というのか。

私たちのときは、結婚して家建てて、車をもつということだったが、いまはそういう意識はあまりないのかな。なんで家を建てないといけないの。それよりもっと……。シェアハウスしている人もいるし、身軽にしていたほうがよいと考える人もいて、ついでにいうと結婚もなんですの。そこらへんはよくわからないけど。

梶谷 そういう意味でいうと、収入が少なくて、そんなに消費できない。できないから、さほど消費したいとは思わない人が増えてくれば、それに合ったかたちの世の中のシステムができあがってくるでしょう。ただし、環境問題ということでは、そういう人たちがちょっと増えたから環境破壊が少なくなるかという、そんなことは多分ないですね。

阿部 今回の無印の矢野さんの話を聞いて、キーワードとしてはもしかしたら鞍田君の「愛おしさ」。共有物に対して愛おしさがあるのか、あるいは愛おしさというのはいったいなんなのか。消費は、字面だけみていたら、ことごとく消し去るみたいで、ろくな言葉ではないですね。英語で消費はコンサンプション、肺病ですよ。肺を使って、使って、使って、使い倒して病気になるのがコンサンプションです。そういったことを考えると、あきらかに無理があるというか、なんでこんな考え方が出てきたのかなと思うこともあります。

使って、使って、ポイッと捨てたらよいというのは、私たちはそういった考え方は当たり前だと思っているけど、そういった考え方ができたのはたか

だか50年、100年くらいのことかもしれないなど。もっとそれ以前をふりかえってみると、おじいちゃん、おばあちゃんたちの時代は、ものを大事に使うというのがあったはずなのに、ものに対する意識がだいぶ変わってきているなど。

梶谷 最近は断捨離とかいわれるように、ものをどうやって捨てるかのほうが大事で、使うかとか買うかとかじゃなくて、捨てるということが大事みたいになっていますね。

阿部 パリ条約のころから大きく変わってきたのは、国家が主体ではなくて、一人ひとりの個人の生活が環境問題に与える影響、これに焦点が当たりはじめた。もちろん条約自体は各国で守っていくのですが、それだけでなく一人ひとりの役割をもういちどみなおすような時代に入ったのかなという感じがしたのです。それも踏まえての第3回が、この「生活文化」というテーマ。あらためて自分のいまの生活に焦点を当ててみようかと。

梶谷 そうですね。そこで、「親密」さとか「感じがよい」とか、「心地よさ」とか、そういう価値観が大事なのかどうか、という問いが出てきたのだと思うのです。でも、そのへんは現実には難しく、たくさん消費して贅沢するのが気持ちよいという人は当然いる。無印が企業活動としておもしろいと思ったのは、市場のニーズを見極めてというか、たとえば調査して商品をつくるのではなくて、「理想の消費者」という言い方をしていたかな、「こういう生活をする人」という消費者のモデルをまず先につくって、それで商品づくりをして、消費者がそれに合わせるという。彼らは企業としてあるべき社会や人の価値観というものをつくって、そこに合わせてものをつくったのだと思うのです。そこにほかの人たちが合わせるようになった。

阿部 新しい生き方を提示しているということです。

梶谷 それが、「感じがよい」という言葉で、彼らがあらわしたものだと思うんです。

阿部 それは、課題解決の地球環境学ではなくて、価値創造の地球環境学と

いう感じで、そうしたかっこつきの「企業活動」で一つの生き方を提示する、その生き方を実現するための品物は私たちが用意しますよと。

梶谷 でも、あのときに矢野さんも言っていたけど、それでけっきょく企業として大きくなって儲かるようになったら、一つひとつは環境に配慮したものかもしれないけど、それを大量につくって売るという、ある種の矛盾を抱えている。それは 2000 年代の初期のころかな、無印が大きくなっていったときにコンセプトが揺らいで、社内でも対立というか、「無印ってこんなのでよいのか」ということがあって、離れていった人たちが何人もいたと言っていましたね。それを乗り越えてのいまがある。

彼らは彼らで、企業としての矛盾がある。哲学をやっていると、理念で「これはだめだ、あれはだめだ」とか言います。でも、それはすごく簡単で、理念だけ言っていると、じゃあどうするの、暮らしをどうするのというところに答えられない。そういう点でいうと、無印の人たちは理念を掲げて商品をつくって、その結果、儲かってしまって、矛盾に突き当たって、じゃあどうするののかという、その逡巡というか、彼らの苦闘がすごくリアルでよいなと思いました。

阿部 あのときに矢野さんも正直に「大きくなりすぎて」と言っていた。そしていま梶谷さんの話を聞いて思い出したのは、地球研のプロジェクトの一つで、羽生淳子さんの小規模経済プロ（注3）です。もともとは縄文時代の考古学の専門家ですが、彼女はけっして縄文時代に戻れというわけではなくて、スケールメリットだけを重視するのではない経済のあり方がもしかしたら導き出せるのではないかというプロジェクトでした。これ自身もこれからまたさらに研究を積み重ねなければならないのですが、キーワードとして小規模経済がある。

ただし、一方で、人新世という言葉で、第1回の「地球の想像力 人新世時代（Anthropocene）の学び」のときに言ってしまったのですよ。つまり、

注3) 地球研プロジェクト「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性—歴史生態学からのアプローチ」（2014年度～2016年度）プロジェクトリーダーだった羽生淳子さんは、現在、カリフォルニア大学バークレー校人類学科教授、地球研客員教授。

なんだかんだいいながら、われわれは一人ひとりだけでも地球のうえで、小規模経済がよいと言いながら、これもまた矛盾を提示して、われわれの食卓に並んでいるものは地球の裏からやってきている。これをまた元に戻すのかと言われたら、そうではないでしょうと。大きく逃げ過ぎた問題群を個別に対処してはだめだろう。課題解決型では、次から次へともぐら叩きみたいになりそうなので、別の方法がよいという感じはしている。

4. 信頼は身近でなくても築ける

阿部 いくつかヒントはあるのです。今回の2日目の午前中に参加して下さった地球研の若手、そして東大を中心とした院生の人たちによる哲学対話で出された問い (p.86-87 参照) を見てみると、2グループあって、片方のグループは、「どうしたら生活をスローにできるか」、「既にあるものを探し出すにはどうしたらよいか」という問いが出された。これは、気づいていない価値に気づくということだろうと思いますが、あとは、「お金がなければ文化的な生活はできないのでは」という疑問が出ているし、「なにをシェアすべきか、なにをプライベートすべきか」と。これもさっきの話からすると、すごく重要な視点だと思います。

梶谷 私有と共有のバランスですよな。



阿部 「よそ者にインティマシーを感じられるか」、これはどういう文脈で出たのかな。

梶谷 インティマシーというのと、ある種の排他主義みたいなものが結びつきかねないのではないかということです。スローフードって、そういう政治的背景をもっているんです。じつは、たいへん保守的な地域で起こるのですよね。要するに、外から来たものはだめだ、ここのものがよいのだという、ある種の排他的な純粋主義みたいなものがある、それとスローフードの誕生とは関係しているんです。だから、スローフードがよいとか、有機農法とか健康志向もそうなのだけど、ナチスがとても有名ですよ。

だから、環境問題にしろ、健康志向にしても、外から来るものを排除する。自分たちこそが純粋なのだという発想が出てきやすくて、そういう危険を孕んでいる。食べ物に関して、健康に関して、歴史的にはあるのですよね。だから、ナチスというのは環境政策と健康政策に対しては、たいへん先進国だったのです。

阿部 それはどこかでこれは正しい、これは正しくないとはっきり分けようとする。そういったこととも関係しているのですか。

梶谷 身近なものを大事にして、外から来たものは警戒するという、ある種のメンタリティでしょう。けっこう危険性を孕んでいて、日本の食材はよいけど、海外のものはだめみたいなことも、日本のいまのナショナリズムと連動している部分があると思います。現実に安全かどうかということもありますが。

それと地域経済の地産地消というのも政治的、思想的にはそういう危険を孕んでいるんです。そこはけっこう難しいと思います。インティマシーというものは、身近なものへの愛着ということに限定して、それが大事と言い始めると、外のもの、異質なものってなんなの、ということが問題になると思います。

阿部 いまの話聞いて、たしかにそうだなと思う反面、たしかに身近なものはよしとする。それはたんに信頼関係だけに置き換えられるのではないか

と思うところはある。身近なもの、たとえばしょっちゅう顔を合わせている農家の人のものだったら間違いはないだろうと。向こうも売るときには顔を合わせているから、そんなに変なものは売れないと。

だから大事なのは、たとえ遠く離れた顔もみていない人のつくったものでも信頼できると思えるかどうかですよね。そういった制度をつくれるかどうか。いまおそらく食の安心安全については、どうしても国がそれを保証しなければということになっている。だけど、この時代はフェイス・トゥ・フェイスというか、遠く離れた人でも1対1で個人と個人が、地域と地域がさつと結びつくということも可能ですよね。

梶谷 可能ですからね。だから、だれだれさんがつくった野菜とかという信頼ができるということはありますよね。

阿部 ファーマーズ・マーケットなんかで顔写真を見せているでしょう。売っている人の名前と顔と場合によっては電話番号まで書いている。うちのマックグリーンビー・スティーブン——食と農のプロジェクトをやっている彼(注4)にしてみれば、こんなものはありえないと。(笑)

梶谷 あそこまでやらないと信用しないということですからね。

阿部 逆に彼が感心したのは、つくる側からみたら、俺がつくっているものになんの問題があらうかということ、顔までさらけ出して置いていると。アメリカだったら、そんなことをやっても誰も信用しないから、第三者機関がそれは正しいか、正しくないかを認定する。だから、認証とか認定機関というのは欧米的な発想で、日本人はフェイス・トゥ・フェイスで顔まで載っていて、このおじいちゃんかと、それならまあと。

梶谷 ほんとうかどうかともわからないし、嘘かもしれないけどね。

阿部 嘘かもしれないけど、日本的な文脈のなかで、嘘をつくはずはないと。

注4) 地球研プロジェクト「持続可能な食の消費と生産を実現するライフワールドの構築—食農体系の転換にむけて」(2016年度～2020年度)のプロジェクトリーダー。地球研准教授。

梶谷 ないと思うのでしょうか。いつも不思議だなと思いますけどね。

阿部 そこでいくと、信頼関係をどう担保できるか。コモンズも、おそらくそこらへんにかかってくるのですよね。

梶谷 信頼するということ自体が、愛着というものを信頼に置き換えたら、かならずしも身近でなくてもよいというのはあります。でも、信頼のつくり方、どういうものを信頼するのかというのが文化によっても違うし、都市の人間の信頼の置き方と田舎の人の信頼の置き方とは違うのかもしれない。都市の人って、けっこうブランドが大事みたいところがあるじゃないですか。

阿部 ブランドはね、本来的な意味だとすごく大事ですよ。ブランドというのは信頼の証じゃないですか。あの会社が、あるいはあの人がという、人に置き換えても。だから、これはお百姓さんの顔写真と同じですよ、イメージとしては。「俺の会社がつくっているものなんだから」ということで、変なものをつくれないという。

5. 日本はどこかで一人ひとりの意識の問題にしてしまう

梶谷 やはり地球に対して、個々人がどうするかというのは、少なくとも一つひとつのことに限っては、大きなレベルでは地球環境にそんなに影響しないから、みんな意識もしない。だけどやっぱり私は経済が大事ななと思います。けっきょく資本主義をどうするかという問題かなと思うんです。それは、



いまの資本主義を根本的に変えるとかではなくて、たとえばゴミ処理とか環境問題に対する取り組みで、私はドイツに住んでいたことがあるので、ドイツと日本の環境問題への取り組みをみると、日本はどこかで一人ひとりの意識の問題になってしまう。

みなさん気をつけてくださいと言うのだけれども、みんな気をつけられないので、たとえば環境のためになにをしていますかと哲学対話で聞いたことがあるのですが、みんながしているのはゴミの分別くらいでした。たとえば某ファーストフード店では、ゴミは分別しているのだけれども、捨てるときは全部いっしょに捨てていると聞いたことがあります。「分別しています」というポーズをみせているだけなのですよ。彼らがまとめて捨てているのは、彼らのせいかという、そうではなくて、ゴミの収集のシステムがそうになっているから、そうせざるを得ないと思うのです。

だから日本では、制度的には個々の良心に任されてしまっていて、それぞれがなにも意識しなくても、ちゃんとそうなるようにできていない。たとえば、ドイツでは、プラスチックのトレーでものを小分けにして売ることをそもそもしないのです。だから、ドイツで暮らしていると、日本ほどのスピードでプラスチックゴミは出ない。日本のように、普通にしているもあつというまにゴミ箱がプラスチックで溢れるということはないから、個々の人の意識の問題にはしていないのです。あくまでも制度としてどうするのかを考えているのです。

阿部 欧米で一括りにするのは問題だけれども、環境問題に対するさまざまなコンセプト、言葉、これはすべて欧米ですよ。持続可能性とか生物多様性も欧米の研究者がつくりあげた概念です。生態系サービスとか、もうすこし身近なところでも、いろいろな言葉、制度などにしても、欧米主導でやっている。

でも、「だけれども」というのを考えたいのです。日本のよさ、日本からなにか環境問題について世界の人に発信できるのではないかという思いがかなりあって、もういちどそれをみなおしてもらおう。日本人は個人一人一人の意識の問題になってしまうといったところで、いまこの時代の地球環境問題——つまり、いままでの国が主体の時代ではなくて一人ひとりとなったときに、

制度や法律とかにもよらずに、一人ひとりの行動で、これが環境問題のためにも大事だということを一人ひとりができる。日本ではやっているみたいな話になってほしいなど。

6. 「ローカルからグローバルへ」は「地方から都市へ」の相似形

梶谷 たとえば、過疎の村とか限界集落とか、そういうところだから問題がたしかにあると思うのだけれども、翻って考えると、東京でも過疎化している地域はありますよ、多摩とか。ああいうのをみていると、地方で「問題だ」と言っているのは、じつは都心でも同じような問題があって、なおかつそれを解決する手立てや資源、人間関係は、地方のほうがあつたのです。地方の問題を都市の論理でなんとかしようとするのだけれども、その逆で、都市の問題を地方の論理で考えたほうがよいことがすごくあると思いますね。グローバルなものがローカルに影響するのはわりとわかりやすいのだけれど、ローカルなものがグローバルに影響を与えるのかとなると、それは地方のものがどうやって都市のものに影響を与え得るかということと、問題としては近いと思います。

阿部 共有型経済と関連させながらもうすこし話したいな。

梶谷 共有型経済というのは、田舎では当たり前にならなことが起きていたりします。コモンズの問題もそうなのですが、むしろ、都市の問題を考えるにしてもヒントになる。新しいかたちで、そのままというのは無理なのだけれど。むしろ地方のほうに解決のヒントがあるのかなと。

阿部 じつはびっくりすることに、柳田國男が『都市と農村』（岩波文庫、2017年）で同じことをいっている。戦前に、いまと同じように農村から都市へとどんどん人が出て行くことを指摘したうえで、「このままでは都市がだめになるよ」と。農村ではなくて、都市がダメになると。農村でできあがったこんないろいろな人を、都市はそのまま受け入れているけれど、都市の文化

なり生き方なりをきちんとつくれるのかと。

都市と農村を対比させながら、なにを心配しているかという、いま私たちは「このままでは農村が……」と言っているけど、柳田國男がその本を書いた時代は、むしろこのままいくと、農村が長い歴史のなかで築きあげてきた生き方、農村で暮らす規律といおうか倫理といおうか、そういうものがちゃんとある。それが都市ではできないうちに、ただ人口だけが膨張してしまう。こうなったら、都市の将来はどうなるのだという疑問を呈している。これは、いまの都市と農村の抱えているものを、すこし違った目でみる、ひとつのきっかけになるのかなと思います。

梶谷 たぶん当時は、都市にこんなに集中するとは思ってなかったのでしょうね。農村は農村で維持できると思っていたらうから。いま地方は、さまざまな価値や倫理があるかないかというよりは、コミュニティ自体が崩壊しつつある。いっぽうで、都市には都市のある種の倫理というか、たとえばあまりプライベートに関与しないと、そういうルールというのがそれなりにできていると思うのだけでも、それだけでもうやっていけなくなった。

阿部 熊澤さんと話していたのですが、じつは都市というのは、ルールはきわめてシンプルなのです。農村のほうが複雑極まりない。簡単によい悪いでは決まらなくて、この人は嫌いだとか、この人とつるもうとか、生きるうえで単純化がとても難しい。それが農村の窮屈さ、しがらみということになるのです。いっぽうで都市というのは、そういったものから自由になった。では、シンプルに生きるとはどういうことか。

梶谷 たしかに。農村がシンプルかというところでもない。都市のほうがシンプルにしようと思ったらしやすいかもしれないですね。

阿部 都市はモノだけでいえば、「いろいろなモノが溢れているのは都市だ」という言い方もできる。ものを一つ買うにしても選択肢がある。田舎では、それほど選択肢はないのです。そこらへんで、無印などの企業活動、あるいは鞍田さんがいう「愛着」、インティマシーも出てくるのかなと。

なにをシンプルというかといえば、たとえばアイヌの人びとの生活用品、

多様な品物を並べている博物館に行くと、ほんとうにシンプルで、必要最低限のものしかない。たとえば小さな匙みたいなもの、あるいは木でつくった刀。でもそこに描かれている模様、これはすばらしい。それぞれ自分の持っているものは、ほかの人とその模様において区別する。機能というところにおいてはきわめてシンプルだけれども、飾り、それも過剰な飾りではないのですが、すばらしい模様が木彫りさえている。これも多様なのですよ。シンプルだけど多様。こういったこともすこし考えないといけないかなという感じがしている。

梶谷 もちろん都市のほうが、たとえば多様とか豊富というのは、たしかにある。だけど、それはいま、日本で豊かさの指標というのを、消費とか生産する財の金額というか量によって測るからです。共有されているものの量をなんらかのかたちで数値化すると、意外と東京は貧しいところかもしれないですよ。いまは都市が豊かにみえるような指標を使って、豊かさをそれで理解している。田舎に行ったときに、田舎のほうが豊かだったり、複雑だったりするようにみえる部分って、数値化はなかなかできないのだけれど、あれを数値化して、そういう基準で都市をみると、都市の豊かさって一気に下がると思います。基準を変えてしまって、違う基準で、たとえば共有されている財がどれくらいあるかを測って、それを増やすようなことをすると、都市でもいままで足りなかった部分が補われたりする。

7. 改めて「関係」について考えてみよう

阿部 いままでは当たり前だということでカウントされなかった価値というものも、私たちは基準としてもたなければ。じつは私は、つながることによって豊かになる価値を「関係価値」と名前をつけているのです。

梶谷 「関係価値」をなにかのかたちで数値化するとよいと思いました。数値化できない価値を問題にするというのも、もちろん大事なのだけれども、それをきちんと数値で反映させられるようにしないと、豊かさの指標がわか

らなくなりますよね。

阿部 金銭的に値札をつけるとしたら、私はすごく抵抗がある。ただし、それを取り出して、目にみえるようなかたちで、「これは大切なものですよ」ということは言っていかなければいけないだろうという感じはする。

そんな話をしながら、そういった価値をつくるという作業は、われわれが対話しながらつくっていかなければいけないものなのではないかなと。私は梶谷さんのこの本（『考えるとはどういうことか－0歳から100歳までの哲学入門』、幻冬舎新書、2018年）を読んで、「よし」と思ったのはどこかという、「哲学対話で自由になる」と最初のほうに書いてあった。対話をする、考えることで自由になる。自由になるものというのは、さまざまな場面であるのだけれども、たとえばいまの話だったら、金銭的価値に置き換えるとか、あるいは都市的な物質的なものだけで判断していた考え方から自由になること。日常を考えていたら、それから抜け出すことは難しいと。

梶谷 難しいですよね。だけど、それから抜け出せると、いま悩んでいることの多くが悩まなくてよくなる。そういうことがあるんです。

阿部 それが哲学対話。対話ということベースにすることによって、もちろん課題解決にも対話を使うのだけれども、そうでないかたちでの対話を。違和感というものを話し合うことを繰り返すなかで、固定観念から自由になること、それをこれからやっていかなければいけないのかなと。

梶谷 おそらく結果というのは、出すことばかり考えると、せいぜい何か結果が出て、それで終わりです。だけど、結果を出すかどうかを外して考えると、予想しないことがおきたりします。たとえば、阿蘇の大津愛梨（O2Farm 共同代表）さんがオーガナイズして、阿蘇の五つくらの村で対話をしたのです。1年後くらいに追跡調査というアンケートを取ってもらったのですね。

対話に参加したのは、その地域の、主に農家の人ですが、酪農をしている人や、町内会長的な人などいろいろいて、各地域によって違っていました。そのときには、具体的になにかをしようという話ではなくて、「農業遺産ってなんだろうね」みたいな話をしていたんです。それで追跡調査してみると、

具体的になにを始めたのかは聞いていませんが、自分たちでやることをやり始めた人たちが何人か出てきていたのです。なにかを決めて、これをやろうと言って、目標を決めてやったのではないけれども、それぞれに目標をみつけて動き出す人が出てくるというのは、対話をするとうわりとあることなんです。共通の目標、課題をどうしようという話ではないけれども、自分たちで動き出すということがある。

阿部 なるほどね。でも、きっかけはそういった対話、地域のなかで話をすることによって、あるいは相手の言うことに耳を傾けて、そして考える。共有経済を支えるのは人と人との対話しかないかなと。

梶谷 具体的に言葉を交わす必要は、かならずしもないのだけれど、なにかを一緒に共にすることかと思うのです。同時じゃなくてもいいのですが、なにかモノや場所、コトが媒介になって、一緒になにかをしている。そういうことが共有。それは広い意味では対話になっているのだと思うのです。どうしたらよいのかという関心が共通なので、話をせざるを得ない。

阿部 たとえばコモンズを支えるのも、ふだんからコミュニケーションを取っていて、お互いをよく知っているから、「それだったら……」ということでコモンズが成り立っている。それがコモンズを支えるコミュニティのあり方です。コミュニティ一人一人に差があることは当たり前で、でもその差をできるだけ縮めるために共有資源を使いましょうと。

そんななかで、お互いがお互いをよく知っている。それが田舎生活、農村生活のなかでプライベートがなくて、全部オープンになってというしがらみにも通じていくのですが。いまお聞きしていたら、いちいちそういった対話とか、相互監視的なことをやらなくてもよさそうですね。

梶谷 インターネットをそういうものにどれくらい活用できるかわからないのですが、別の手段で結びつくことってできるから。都市ではいま、隣の人よりもネットでつながっている人のほうがはるかに身近でいられる。それはいわゆる地縁とは違った新しい縁ですよ。

阿部 でも、その新しい結び方というのは、いったいなんなのか。それがほ

んとうに共有経済というところまでいくような方向でいっているのか。

梶谷 かつて UTCP で脳性麻痺をもった人を研究員として雇用していたことがあって、いまは神戸大学の教員になっているのですが、彼女は Facebook がなかったら自分は生きていられなかったと言っていたのです。彼女は喋るのに困難があるので、人と直接に話すのは、相手が聞き取りにくそうな顔をするだけでも負担なのだと思います。だけど、Facebook ならそういう障害をお互いにいっさい感じずにやりとりができる。

とくに障害をもった人とか、そうではなくても、それがなければただ孤独なだけの人はどうするのか。この前、障害者の演劇ワークショップに行ってきました。私のグループは演劇関係の人ばかりで、障害をもった人はいなかったのですが、オーガナイズをしていた人が言っていたのは、「いまは音声だけでメールを書いたり読んだりできるから、目が見えない人もメールを打てるのです」と。しかも、「相手は目が見えない」ということを忘れるくらいのタイミングで文章が返ってくるのだそうです。それがなかったころは、彼らは直接に人とやりとりをすることができなかった。それが IT 技術のおかげでできる。

阿部 そうなってくると、哲学対話というのは、フェイス・トゥ・フェイスはひとつの仕方としてありますが、この時代だから、もっとべつのかたちの対話の仕方というのがあるかもしれない。哲学対話で生まれたような自由さで対話する。問いかけ、考えを聞く、話すということを繰り返す。これによって新しいものも生まれるし、障害者の人も障碍から自由になる。

梶谷 哲学対話と Twitter を組み合わせて、その場にはいない人が参加できるようにしたこともある。それは体の障害もそうだし、物理的な障害も距離も、乗り越えられるのです。人前で発言するのが苦手な人も Twitter だったらできたりする。Twitter を組み合わせたときは、80 人くらい参加したんですが、大人数でも対話っぽくできました。みんなのコメントや問いを Twitter に書き出して、こっちで話しながら、参加者が思っていることはスクリーンで共有できる。

IT 技術や SNS で救われている人はたくさんいます。それがあって初めて

つながれる関係もある。次は、「つながる」ということをテーマにしてもよいかもかもしれませんね。情報や知識、問題を共有すること。それと、人間関係。「関係」ですよ。

阿部 私はどうしてもそこで、媒介者というものを想定するのです。媒介者を必要とするつながりもあるし、必要としないで、それこそインターネット上でパッとみんながつながっていく。

梶谷 たとえば、障害者だったら、手話通訳が必要な状態と手話通訳がいなくても直接にできるような関係をつくり出すということですよ。それは機械でできるようになる場合もあるし、場のデザインの仕方でも、そういうものを克服することもできる。

阿部 あるいはその二つで違う方向になるということもあるかもしれない。

梶谷 媒介者がいるときといないときとね。環境問題とか、社会問題はすべてそうだけれども、けっきょくは一人で解けるわけではないから、関係というものを基礎にしないとなにもできないのですよ。それは今後のテーマにはよいですね。

阿部 やりましょう。

